

《研究ノート》

絵本はSDGsの土壌(2) —ストーリーを超える絵の力—

田中幹子

はじめに

『絵本はSDGsの土壌』と題し、SDGs カタリストの奥山津久海氏とともに、講演・展示会^(注1)を行い、その報告の前編を昨年発表した^(注2)。本稿はその報告の続編である。前稿ではSDGs 普及と絵本との関わりと子ども心の発達に重点を置いて報告した。本稿は講演会で考察した絵本のうち前回報告できなかった『てぶくろ』『おおきなかぶ』『スイミー』を中心に、絵の力に注目し報告する。

1 『おおきなかぶ』『たろうのおでかけ』の絵の力

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まった2022年2月24日以降、『てぶくろ』^(注3)と『おおきなかぶ』^(注4)は特別な意味合いを持つ絵本となり、書店の一般書のコーナーに平積みされることが多くなった。おじいさんが落とした片手のてぶくろの中に様々な動物と一緒に暮らすウクライナ民話の『てぶくろ』、おじいさんが育てた巨大なかぶを家族全員だけでなくネズミまで協力して抜くロシア民話『おおきなかぶ』である。この絵本のように分け合い協力して暮らすような平和な世界観を、人々が願うためである。クレヨンハウス主宰・落合恵子氏の「ウクライナ民話『てぶくろ』の意味するものを。」の一部を紹介する^(注5)。

「ウクライナの民話『てぶくろ』を開いてみてください。雪の中に落ちた一方だけの手袋の中に、次々に動物が入って暖をとり、分かち合うあの話。

いま世界に必要なのは、「分かち合うてぶくろ」です。ロシア昔話の『おおきなかぶ』。いささか楽天的に響くかもしれないが、力を合わせればできないことはない、とわたしたちは信じたい。何が出来るんだろう?」。

同じように思い、書店で手にとる人も多い。しかし、両書の出版元である福音館はそのような政治的解釈に対し消極的である。J-CAST ニュースが版元の福音館書店に対して両絵本のメッセージや反響の受け止めなどについて取材すると「本件について、詳細なコメントは控えさせていただければと存じます」としながら「弊社としましては、これからも多くの子どもたちが、同作品の絵本の世界を夢中になって、楽しんでくれたらと、考えております」とコメントとしている^(注6)。本稿では政治的解釈は考慮せず、絵に注目し、読者に与える影響について論じていく。

まずは『おおきなかぶ』のあらすじを紹介する。

『おおきなかぶ』は、おじいさんが植えたかぶがあまりに巨大に成長したため、いざ抜こうとして踏ん張るのがびくともしない。おじいさんはおばあさんをよび、おばあさんは孫をよび、孫が犬をよび、犬が猫をよび、「うんとこしょ、どっこいしょ」。でもまだかぶは抜けない。最後に猫はネズミをよんだ。「うんとこしょ、どっこいしょ」ついにかぶは抜けた。

心地良く繰り返されるリズムが特徴のテキストである。「○は○をよんできました」「○が○をひっぱって」「うんとこしょ どっこいしょ!」「それでも」「まだ まだ」「まだ まだ まだ まだ」「・・・かぶはぬけません」繰り返されるフレーズは子どもの心を捉え、声を出して読むようになる。ページを追うごとに子どもの期待はどんどん高まり、緊張はちいさなネズミの参加でさらに高まり、ついに一気にかぶが抜け、爽快感を得る。子どもに安心して読み聞かせできる名作として60年以上支持されてきた。

この物語は小1国語科『おおきなかぶ』（光村図書）に取り上げられている。学習指導要領に基づき教員は「繰り返しの表現に着目し」「挿絵を活用した板書を工夫し」「繰り返しの文や主語、述語の関係 が分かるようにセンテンスカードで提示」等工夫をし、読む能力を高めようと指導する。そして「単元目標」を「声に出して読んだり場面の様子を想像したりしながら、音

読劇をすることができる。」とする。教員は音読させたり、劇に仕立てたりなど工夫しながら、教材を理解させていく。この教材を学んだ生徒の感想は「みんなで力を合わせることが大切なのだと学んだ」というのが概ねである^(注7)。

この物語の絵本として最も著名なのは、福音館書店から1966年に出版された佐藤忠良が絵を描いた絵本であり、教科書にもこの絵本が採用されている。



テキストが注目されることが多いが、筆者の絵本の講座の受講生に聞くと、今でも脳裏に記憶されるのは、ストーリー以上に佐藤忠良の描いたロシアの貧しい農民の姿であると言う。『おおきなかぶ』は、いくつもの絵本が他の出版社から出ている。



「おおきなかぶ」
平田 昭吾作・高田由美子絵 1998 年
ポプラ社世界名作シリーズ



「おおきなかぶ」中脇初枝 作・山田みちしろ
／田中静恵 絵 2018 年 ポプラ社



いもとようこ世界の名作絵本
「おおきなかぶ」いもとようこ 作
2007 年 金の星社



学研のえほんやさんシリーズ
「おおきなかぶ」はやしあやこ 作・鈴木えり
ん 絵 2014 年 学研ホールディングス

この3冊のような明るくポップな絵は佐藤忠良の絵とは大きく異なる印象である。佐藤忠良の絵本に幼い時に触れた読者は、無意識のうちに佐藤の絵によってロシアの農民の姿を認識する。この絵のリアリティは、佐藤忠良の過酷なシベリア抑留の体験によるものである。読者が成長するにつれ、厳し

い環境で生きる家族にとって一つの「かぶ」は貴重な食べ物なのだと思います。馳せるようになるかもしれない。

絵本は時にストーリー以上に、絵の一場面や色調が読者に大きな影響を与える。一昨年放送されたNHKのドキュメンタリー^(注8)の中で、ある女性が『たろうのおでかけ』という絵本を探していた例を紹介する。

探していた理由は幼い頃、祖母の家にこの絵本があり、祖母への思いと重なるというものだった。彼女は、ストーリー以上に絵本の背景色であるショッキングピンクをもう一度見たいと言っていた。その色が自分に元気を与えてくれるという。ショッキングピンクなればどれでもいいのではなく、あくまで



『たろうのおでかけ』村山桂子作・堀内誠一
絵 1966年 福音館書店

も『たろうのおでかけ』の背景に元気づけられたのである。この本のピンク色には、いつでも温かく迎えてくれた祖母の家の匂いや空気の思い出が連想されるのだ。絵本はストーリー以上に絵の印象が記憶に残るのだ。

2 ラチョフの二つの『てぶくろ』

ロシア民話の『おおきなかぶ』とともに社会的な側面から最も注目されているのが、ウクライナ民話『てぶくろ』だ。ストーリーは以下の通りである。

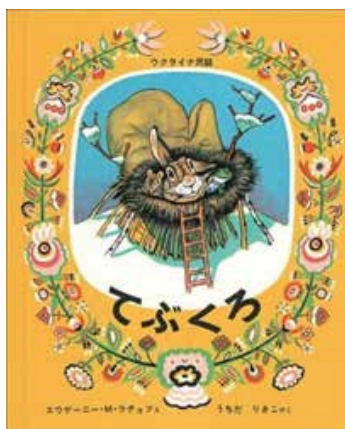
吹雪の森でおじいさんが手袋を片方落としてしまう。雪の上に落ちた手袋に〈くいしんぼねずみ〉がやってきて自分の家にすることにした。するとその手袋に〈はやあしうさぎ〉や〈おしゃれぎつね〉など、様々な動物が次々

とやってきて「私も入れて」という。今にも破けそうになりながら、ぎゅうぎゅう詰めになっている時、おじいさんの飼い犬が手袋を探し「わんわん」と吠えながらやってきた。とたんに手袋の動物たちは、慌てて逃げ出した。

何かを家の代わりしてそこに動物が次々に住みつくスタイルの民話は、東スラブの国々に多くある。『ロシア民話集』にも、「蠅の御殿」「つば」などの類話がある^(注9)。動物のあだ名が面白いこと、動物が小さなものから順に現れて、クライマックスへ向けて増えていく累積型の民話であること、現実には不可能な小さなものの中に動物たちが入っていくこと、新しい動物の登場のたびに名乗りあい、これまで登場した動物の名前が繰り返されること、最後にやってきた者(『てぶくろ』の場合は、おじいさんの飼っている仔犬だった。)によってすべてが台なしになるという共通項目を持っている。口承文学だった民話を、ウクライナ語からロシア語に訳したのは、子どものための詩を多く書いたロシアの詩人エレナ・ブラグニーナである。『てぶくろ』は多くの絵本が出版されているが、最も知られているのは、エウゲーニー・M・ラチョフによる『てぶくろ』である。日本では福音館書店から1965年刊行された。てぶくろは累計300万部を超える百刷本だ。

エウゲーニー・M・ラチョフは1906年ロシアに生まれた。『てぶくろ』を発表したのは1950年。ラチョフ、44歳の時である。ラチョフの生きた時代はスターリンが独裁政治を行っていた時代である。52歳のスターリンが「大粛清」を行った1930年にはラチョフは24歳だった。

田中友子氏は「シベリアの自然で育っ



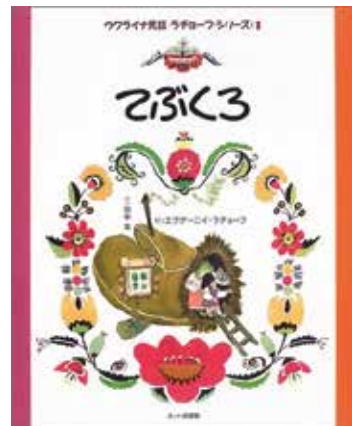
ウクライナ民話「てぶくろ」
エウゲーニー・M・ラチョフ
うちだりさこ 訳 1965年 福音館書店
初版 2008年版143刷、2022年
第176刷

たラチョフには動物は身近な存在だった。ラチョフが服を着た動物を描くようになったのは1947年以降のことである。ラチョフは大道芸、ルポーク(ロシアの民衆版画)、民芸品やサーカスなどに登場する服を着た動物が、人間に似ているのを思い出し、服を着せることを思いついたとされる。ラチョフは、ロシアの民話にでてくる動物にはロシアの民族衣装を、ウクライナ昔話にでてくる動物にはウクライナの民族衣装を着せることでそれぞれの民族色を大事にする信念を持っていた。また、農民のボロ外套、貴族が身につけていた上等な裾長外套などを着せることによって、当時の社会に対する風刺の要素を表現した。」と、冊子カスチョールの中で書いている(注10)。

これによると、ラチョフが動物にウクライナの民族衣装を着せて描いた時、出版社は困惑したという。スターリン粛清の時代、出版は検閲が厳しかった。出版社は体制批判と受け取られることを恐れ、動物にウクライナの衣装を着せないように説得したが、ラチョフは承知しなかったという。7ヶ月も揉めたあげく、あらゆる機関の官僚に加えて、作家や芸術家たちが召集され、長い協議の末にようやく1951年にソビエト連邦で刊行された。ラチョフ、45歳だった。

ラチョフは1978年、72歳の時、ウクライナ民話集《麦の穂》のために、もう一度『てぶくろ』を描いている。しかしその画風はまったく違ったものだった

新しい『てぶくろ』は、1951年発表の『てぶくろ』とは絵の印象がまったく異なる。動物達は笑みを浮かべ、時間は短日ののみになり、背景の描き込みもなく色調が明るくなり、全体的にデザイン化され物語の面白さに視点を当てたものになっている。全体の印象がかわいらしくなり、ポップに描かれている。この絵本ならば



ウクライナ民話 ラチョーフ・シリーズ 1・田中潔 訳 20003年11月
ネット武蔵野

スターリンの怒りには触れなかったかもしれない。新しいラチョフの『てぶくろ』に描かれる動物たちは、ぬいぐるみやマスコットのようであり、1951年の最初の『てぶくろ』が持つ非常に人間臭い絵とは別物である。最初の『てぶくろ』の動物たちは、そのままウクライナの貧しい農民、小金持ちの地主、商人のおかみさんなど、様々な階層の人々そのものだった。登場人物(動物)一人一人(一匹一匹)の存在感があった。

もう一つ両書の重みの違いをもたらしているのは、空の描き方であった。初期の『てぶくろ』の空は、ねずみ色で重たい空である。動物が登場するたび、時間が刻々と経過するのが、灰色の濃度で表していた。この重たい空は、スターリン粛清時代の空気を表しているようにも思われる。政治問題を一旦置いて、初期の『てぶくろ』には絵本全体には重い空、厳しい寒さ冷たい風が覆っており、このような中で生きる過酷さが想像される。生きるために、ふかふかの毛に覆われた家に身を寄せ合いたくなる気持ちが共感できる。衣装だけでなく、実際の厳しい風土が確かに描かれているから、そこに暮らす人たちを想像できるのである。このリアリティはこの絵本独自のものである。



初期の『てぶくろ』にはそれぞれの民族を尊重する意識が伝わってきた。しかしそのメッセージ性は新しい『てぶくろ』からは伝わらない。空はカラ

フルで、動物たちはどこまでもかわいくて明るいマスコットのような描かれている。



「つながっていこう～オンライン版～絵本で支援プロジェクト公式ブログ」でもこの両書を比較し次のようにコメントしている。「動物達は笑みを浮かべ時間は短日のみになり、背景の描き込みもなく、色調が明るくなり、全体的にデザイン化され物語の面白さに視点を当てたものになっている。」とし、「1950年に描かれた『てぶくろ』から私がもらったメッセージ性はなくなっていた。」^(注11)

『おおきなかぶ』と同じように、『てぶくろ』も他の画家が描いた絵本が数多くある。先に紹介した絵本支援プロジェクトでは、横内襄氏の絵本と比較し、次のようにコメントしている。

「横内の『てぶくろ』は一方向から動物が現れる。反してラチョフの『てぶくろ』は多方向から動物達が現れる構図になっ



「世界の名作えほん てぶくろ」
田中かな子 訳・横内襄 絵
日本幼年教育研究会 編、メイト
1995年

ていた。これによって動物達の森の住処の地図が見えてくるように工夫されていた。さらに、両画家とも動物に服を着させているが、ラチョフの衣装の方が、民族服に多様性をもたせている。」やはりラチョフの絵の持つ重厚さや、冬のウクライナの風土のリアリティには及ばないといえる。

3 『スイミー』 レオ・レオニの思いと読者の思い

『スイミー』は、アメリカのレオ・レオニが1963年に発表した絵本である。グラフィックアートディレクターらしい版画の手法を駆使した、透明感あるイラストの絵本である。あらすじを紹介する。

スイミーは小さな真っ黒い魚。たくさんいる他の兄弟はみんな赤い。でもスイミーは誰よりもすばやく泳ぐことができる。兄弟たちと楽しく暮らしていたが、ある日大きなマグロが現れ、兄弟がみな食べられてしまう。スイミーだけが逃げることができ、スイミーはひとりぼっちに



『スイミー—ちいさな黒い魚の物語—』(好学社) レオ・レオニ 作絵・谷川俊太郎 訳

なった。独りのスイミーは、様々な出会いをする。やがて岩陰に自分の兄弟にそっくりな赤い魚たちを見つける。しかし彼らは大きなマグロに怯え、岩陰から出られない。スイミーは「うんと考えた」。そしてみんなで大きな魚を形作ることを呼びかける。「ほくが、目に なるう」。マグロを追い払うことができた。

この話は、「小学2年国語」の教科書(光村図書)に掲載されている。千葉大学教育学部附属小学校教諭・宮本美弥子先生の「スイミー」の教材報告

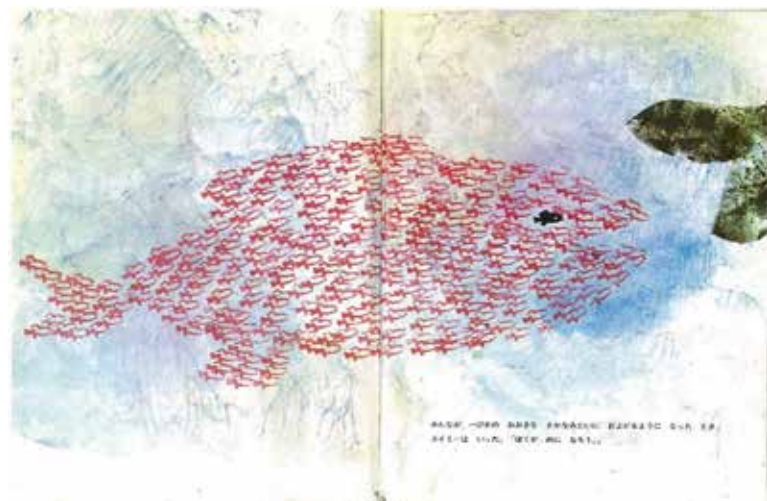
を紹介する^(注12)。「自分の感想をもち、友達と感じ方や考え方の違いを共有する。」ために「自分でお気に入りの場面を選び、考えたことを話して共有する。」「この後の展開を想像させる言葉を取り入れるなど、友達に伝える。」等のアプローチをしている。生徒の授業感想は、「スイミーはうんと考えて、大きな魚になることを思い付いたことがすごいと思いました。」「スイミーが一人ぼっちになってかわいそうだったけど、海の生き物たちを見て元気になってよかったなと思いました。」「みんなが持ち場を守って泳げるようになるまでに、たくさん時間がかかったのかなあ」というように物語世界に没入した感想が紹介されている。スイミーが様々な出会いを経験し、知恵や勇気を振り絞り、最後にみなと協力して大きな魚を追い払う。このように「スイミー」は「みんなで力を合わせれば何でもできる」がテーマのように思われている。

しかし作者レオ・レオニのメッセージは別のところにあった。『スイミー』を著す直前、レオ・レオニは成功の絶頂にあったアメリカでの名声を捨て、故国イタリアへと戻っていたのだ。その後、イタリアで自分独りで本格的な芸術活動を開始し、次々と絵本を出版した。

レオ・レオニは1910年にオランダで生まれ、イタリアで暮した。彼は二度の世界大戦を経験した。1939年、レオ・レオニ29歳の時、ナチス・ドイツによるポーランド侵攻が起きた。ムッソリーニ政権から逃れるために、ユダヤ人であるレオ・レオニはアメリカに亡命した。レオニは、1959年49歳の時、孫のために作った「あおくときいろちゃん」で絵本作家としてデビューした。しかし、アメリカ国籍も取得し、成功を収めていたにもかかわらず、1962年、すべてを捨てて、再びイタリアへ戻る。

スイミーの物語と同じように、レオ・レオニも同じユダヤ人仲間を戦争により多く失った。スイミーの喪失感は、レオ・レオニのそれだったのだ。スイミーは孤独と喪失を乗り越え、新しい仲間たちと出会い、大きな魚を追い払った。レオ・レオニもアメリカで成功し、芸術家として才能に自信を持つようになり、第2次世界大戦後の世界の中で、自分はどのような役割を担えるのかを模索していた。その自分の姿をレオニは一匹だけ黒い魚になぞらえ

たのだ。スイミーの「ぼくが、目に なるう」は、レオ・レオニの芸術家のリーダーになるという宣言なのだ。確かに絵をよくみると、目となったスイミーは戦う目をしている。



レオ・レオニは、芸術家として成功した自分が、今度は、イタリアの芸術家やユダヤ人などのリーダーになるという決意で『スイミー』を発表した。しかし絵本は発表されれば、読者のものになる。小学校での教材指導の結果、生徒たちは「みなで協力し合えば何でもできる」という思いを抱くことが主だが、先の指導の実例のように「スイミー」の孤独に思いを馳せる生徒もいる。昨年発表した拙稿でも長年読み続けられた本は、年齢によって多様な読みが可能であることを論じた。『スイミー』も同様であるが、本報告では、筆者が絵本の講座を持っている授業での学生の感想を紹介したい。

絵本の講座の受講生たちは、小学校の国語の授業や、保育園や両親からの読み聞かせなど様々な場面の経験を持ち、ほとんどの学生が『スイミー』を知っていた。しかしそれ以来『スイミー』を読んでおらず、学生たちは、講

座で10年以上ぶりに『スイミー』を読んだ。すると意外な感想がでてきた。本には書かれていない物語が、学生たちの記憶として創り出されていたのである。それは「スイミーは仲間から疎外されていた、いじめられていた、だから一人ぼっちだった」という記憶の書き換えがされていたのである。スイミーは仲間から一人だけ色が違うので、仲間外れになっていた。だから生き延びた。その虐められていたスイミーが様々な出会いを経て、新しい仲間の指導者になったと、物語を記憶している学生が数多くいたのだ。

勿論、教科書や保育園などで読んでもらった時は、本来のストーリーだった。にも関わらず、記憶の改ざんがなされるのは、日本社会では異端は排斥されやすいという同調主義が背景にあるのだろう。これは、よく知っていると思っていた絵本でも、ストーリー以上に絵が印象に残るということを意味している。読者は成長するにしたがって記憶に残っている絵を軸に、自己の経験を踏まえて物語を脚色していくのではないかと思われる。レオ・レオニが描くすばやく泳ぐことができる黒いスイミーは、コンプレックスは持っていなかった。ただ仲間を失った悲しみを抱え、様々な出会いの後に遅しくなって知恵も付き、「ぼくが目になる」と言えるように成長する話だったのだ。それを学生たちは一匹だけ黒かったならば必ずいじめられたに違いないという思い込みを持っていた。皆が一緒になければ生きにくいという日本社会の風土のためである。

学生たちは、10年以上の時を経て、あらためて絵本を読み、様々な気付きに出会う。「確かにスイミーは同じ小さな赤い魚たちを救ったけれど、この群れは新たな群れであり、スイミーの兄弟たちはもう食べられてしまったのだ」、或いは「マグロは悪のように扱われているが、生きるために当たり前のことをしている」など、幼い時には感じなかった点が気になるようになる。

4 おわりに—絵の力—

各人々に思い出の絵本がある。しかし常に手に取り続けるという事はあまりない。各自の脳裏に刻まれた絵本は、人生経験や環境によって物語の記憶は変容することがある。絵本のある一場面や色調がその人にとって特別な意味合いを持ち、自分の物語として変容するのである。しかし、読者の手に渡った絵本は、筆者の思いに寄り添うことを強制されるのではなく、読者それぞれにとっての思いをもってどのような解釈も許される。幼い時に出会い、記憶に残った絵本ほど、それぞれの記憶の中で物語が自己流に変容している可能性がある。そうであっても、読者にとって、その絵本の持っている色調やタッチ、ある場面を自分にとっての特別なもの、大切なものと記憶していく。

絵本は絵の力によってストーリー以上の影響を読書に与えることがある。絵本は書店や図書館に並べられ、人々の手に取られた時から、読者のものである。幼い頃、まだ人格形成が完成される前に、保護者から読み聞かせてもらった時の思い出、小学生の頃、教科書として学んだ記憶、それから十数年、或いは数十年経て読者はそれぞれの人生経験の結果、遠い記憶の中にある絵本は、変容して記憶することもあるのだ。しかしそれは単なる誤りではなく、それがその人にとっての絵本の受容であり、その受容が人生を支えることもある。絵本は読者がどう理解しても許容してくれる大きな懐を持っている。そして読者の記憶に刻む大きな影響をもたらすのは、絵の力といえる。

注

- 注1 剣淵町立「絵本の館」展示ホールB「絵本との出会いは持続可能な社会 SDGs への入り口ー普及」・2022年展示期間7月11日～18日・7月11日と18日講演会実施、札幌市立「西岡図書館」・2022年展示期間10月27日～11月23日・11月5日講演会、千歳市立教育文化会館「北ガスオール」・講演会・2023年2月19日
- 注2 『札幌大学紀要』2023年3月田中幹子・奥山津久海「絵本はSDGsの土壌（1）ー自発的な心に成長するためにー」
- 注3 エウゲーニー・M・ラチョフ作／うちだりさこ訳 福音館書店（1965年）1951年に旧ソビエト連邦で出版
- 注4 A・トルストイ再話／内田莉莎子訳／佐藤忠良絵 福音館書店 1966年6月
- 注5 連載毎日フォーラム・あしたの日本へ2022/5/10 <https://mainichi.jp/forum-ashita/>
- 注6 J-CAST ニュース
- 注7 例えば【おおきなかぶ 学習指導案】小学1年生「おおきなかぶ」をフレームリーディングでやる！単元まるごとの指導案公開！ーがむしゃランナー（gamusyarunner.com）
- 注8 2022年6月10日放送NHKドキュメンタリー「ドキュメント72時間ー絵本専門店ーわたしの物語」
- 注9 『ロシア民話集』（岩波文庫）上下2冊揃、著者アフナーシェフ編、中村喜和 編訳 岩波書店（1989年）
- 注10 カスチャール 21号（2004.3.3）「E.ラチョフ描くふたつの「てぶくろ」をめぐって」田中友子 koctep
- 注11 伝えていきたい絵本『てぶくろ』| つながっていこう～オンライン版絵本で支援プロジェクト【公式ブログ】（ameblo.jp）（2021年8月29日「つながっていこう～オンライン版～絵本で支援プロジェクト公式ブログ」
- 注12 『教育技術 小一小二』2020年6月号より小2国語「スイミー」指導アイデア 小学校教員のための教育情報メディア「みんなの教育技術」小学館

＊本報告は、2023年度札幌大学研究助成の成果の一つである。